

河原ノ者・非人・秀吉

服部 英雄

(比較社会文化学府長・研究院長)



明治維新の時、賤民とされていた人々が多くいた。そのうちエタ身分は全国人口比で1.47%、福岡藩はとりわけ多く、5.8%で一万人をこえていた。その後裔に当たる人々も、いま同程度の割合がいるはずである。わたしが講義で250人の学生を対象としている場合なら、該当する学生が15人は受講していたことになる。彼ら彼女らから直接人権問題について聞く機会はこれまでなかった。しかし一度も苦しまなかったとは考えられない。差別は身近なところにある。

われわれが親の世代から聞いていた差別のイメージと、自分のこどもたちから聞くそれは全くちがっている。子たちが結婚する時には差別はなくなってほしい。そのまた子たる、孫の世代にまで差別があってはならない。前世紀の遺物、差別は完全に解消していなければならない。しかしいっぽうインターネットには知性を欠く低劣な書き込み・暴言があって、永久に消されることなく残っていく。

差別する側こそ、みにくく、弱い心の持ち主である。この本は差別を憎み、歴史学の側から差別の根絶に貢献するために執筆した。非人間的・非人道的差別はわれわれの世代で解消したい。

本書は河原ノ者・非人といった中世に賤視された人々のくらし・生き方を描こうとした。かれら・彼女が後世に残した誇り高い技術・文化を紹介したかった。庭ノ者ともいわれた河原ノ者の作庭技術、また土木技術、獣医、あるいは太鼓や、武具製作など高級技術者としての側面、警察や刑吏としての行刑・公務への関与、非人の場合にはハンセン病と各地に置かれた悲田院、新善光寺との関わり、芸

能への寄与など被差別民像の具体的提示を目的とした。差別されたはずの側が常に権力と一体化していて、その一部を構成していたことの意味も問いたかった。

版元の宣伝部門が「歴史学のタブーに取り組んだ渾身の一冊」というコピーを考えてくれた。精力をつぎ込んだことはまちがいない(「タブー」は、後段の豊臣秀吉のことをいっている)。ずっと以前からの構想があって、私が研究院長になる前に9割は書き溜めてあって、あと一歩のところまでできていた。だから一日でも早く刊行したかった。研究人生で最大の峠越えだった。院長の業務は多忙を極め



毎日新聞 5月20日

る。万全の備えはできず、残念ながら初歩的なミス・誤植も防げなかったけれど、刊行できた喜びはとても大きい。百点満点ではないにせよ、満足度はある。上梓後の疲労感(虚脱感)もいつもより長く残る。

編集担当者・酒井直行さんには世話になった。会社の方針で「あとがき」にその名前を出せなかった。酒井さんも「達成感がある」と喜んでくれている。酒井さんはこれまでも差別関係の本を多く出してきた。ともに出した差別関係の雑誌もある。差別問題は現実と直結し、政治課題・運動とも関わる。いくつかの課題を解決してもらった。

刊行後一月が経過した。ついついネットでの反応を見る。情報の広がり方からネット社会の本質を知った。タイトルに意外性があったためだろう、刊行直後に、本書の題名だけは拡がった。しかしそこまで反応は止まる。毎日新聞に五味文彦氏の書評が出て若干情報は拡大したが、拡がるのはそのコピーだった。批判・読後感はその後もしばらくは、現れなかった。強い影響力を持つとはいうが、しょせんネット社会は無限にくりかえされるコピーであって、学問とは限りなく無縁だ。書店に足を運ぶ人とはそこがちがう。

大部で重量もあるから敬遠されるという予感があった。しかし、全部読み終えたという報告ももらった。さまざまなデータから本書が市中に好意的に迎えられていると実感はできた。刊行後一月を経て、版元から増し刷りを決定したという連絡ももらった。自著(単著)は8冊目になるけれど、このような短期での増刷は初めての経験である(その後1月を経て再度の増刷、3刷となった)。読者にはなぜ被差別民の世界と秀吉が結びつくのかという関心があったのかもしれない。だれもが知る豊臣秀吉が、実は幼時に非人の世界に身を置いていたという観点から歴史を見直

す。秀吉の英知と人心把握は、下層社会の知恵と人間的感情があったからだ。脱賤は容易ではないが、非人の場合は制度的にも不可能ではない。対立する家柄を誇る武門一門、毛利氏、島津氏などは、執拗に彼の出自を問いつづけたが、権力・軍事力の掌握と地位上昇につれ、中央貴顕の側は秀吉が配る莫大な金銭の前に不問とした。差別は弱者には強烈だが、強者には希釈され、昇華もされる。差別の本質が見えてくる。関連して国民の多くがいてきた疑問、豊臣秀頼は秀吉の実子ではなかろうという疑問も解明した。秀吉自身の書状の分析によっても論証ができる。実子ではない鶴松や秀頼の誕生には、陰陽師や祈祷僧が関与したと推測したが、陰陽師は被差別社会と関わりが深い。

ただし本書のうち秀吉論は頁数にして4分の1しかない。手に取られた方は秀吉を扱った部分は、思いのほか、記述が少ないと思われるだろう。著者は当初、犬追物に登場する河原ノ者に関心を持った。犬を標的とする弓の競技である(カバー写真参照)。構想中に恩師の石井進先生と話しをすることがあったが、「秀吉に興味はないか」と聞かれた。そのときは「あまり」と答えた。秀吉が針売りをしていた、賤視される側にいたとする先生の見解は、やがて『中世のかたち』(2002)として刊行されたが、残念なことにそれは遺著となってしまった。石井先生が急逝されることがなかったら、おそらくわたしが秀吉研究に携わることはなかったと思う。『河原ノ者・非人・秀吉』の原形はこうしたかたちで生まれ、準備された。読者には関連がわかりにくいだろうが、著者の問題関心においては、すべて一体化し一連のものだ。この書物を手にすることによって、読者がよりいっそう被差別大衆の歴史と生活、文化に関心を寄せてくだされば、著者の思いは遂げられる。(山川出版社：定価税別2800円、713頁)



朝日新聞書評(田中優子氏)より

あまりにも生々しく、時に本を閉じた。歴史の専門書を読んでそういう気持ちになることはほとんど無い。そこに本書の方法的な特徴がある。極めて具体的かつ詳細で、小説を読むような臨場感がある。が、単に面白いというだけでなく、歴史記述の独特な方法が浮かび上がってくる。